

6 SDGs ワークショップ

岩手県立大学 名誉教授 渋谷晃太郎
岩手県立大学研究・地域連携本部 プロジェクトコントローラー 及川敏
特定非営利活動法人環境パートナーシップいわて

該当する
原則

原則 9：持続可能性を推進する

1. 活動の背景

本学では、令和3年度から（国研）科学技術振興機構の「共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT）」において、東京大学を代表機関とする「ビヨンド・“ゼロカーボン”を目指すCo-JUNKANプラットフォーム」研究拠点に、岩手県とともに「岩手サテライト」を構成し参画している。

ビヨンド・“ゼロカーボン”とは、ゼロカーボンを達成する時点ではなく、さらに先にある在りたい将来の姿からバックキャストすることで、具体的かつ魅力的な気候変動対策を検討できる社会を目指している。

本研究において、岩手サテライトでは、研究課題2「自律的変革を生むCo-learning基盤」に参画しており、Co-learning基盤となるシステムの開発・フィールド実験を通じ、地域の人材育成プログラムを各地で展開しながら、ゼロカーボン社会の実現を目指す地域モデルの確立、持続可能な地域循環型社会システムづくりを目指し、地域の人が自然と集まれる場であり、多様な人々が交流し、自律的・体験的に学べる場をデザインし、運用する「バづくり」、地域の人が専門家とともに学び、それを踏まえて地域の未来のビジョン等について対話・熟議を行うCo-learningワークショップ手法を開発・実装する「コトづくり」、大学で実施しているプログラムや授業のノウハウを共有し、かつ既存のものを生かしながら、「地域に学び、地域に貢献する」人材育成プログラムの構築を目指す「ヒトづくり」に取り組んでいる。

また、全国に先行して人口減少と高齢化が進行している地域事情に対して、豊かな地域資源と高速交通網の進展を生かし、産学公が一体となって脱炭素等の環境問題と地域振興の同時解決を進める先行モデルの構築に取り組んでいる。

2. 活動の経過

上記研究の主な取組として、令和5年度においては、一戸町における「ゼミワークショップ」と、葛巻高等学

校及び一戸高等学校における「SDGs ワークショップ」を実施した。

(1)ゼミワークショップ

一戸町では町民からの町政への意見や政策提案を期待し、町民を対象とする「いちのへSDGs miraiカフェ」を実施しており、この取組を補完・支援する目的でゼミワークショップを開催した。

内容としては、一戸町役場職員を対象として、フューチャーデザインワークショップを実施した。フューチャーデザインとは、気候変動や資源エネルギー問題、財政問題やインフラの維持管理など、現代社会は世代をまたぐ長期的な課題に直面しているものの、将来世代が現在の政策決定に意思を反映することができないという問題意識に立ち、現世代が将来可能性（将来世代の利益のための思考・行動）を発揮できる社会の仕組みをデザインするものである。

本ワークショップは11月17日（金）に、18名が参加して開催された。30年前を振り返って現代に影響を与えたものを考えるワークや、50年後の町にタイムスリップし、変わった町の姿について話し合ったり50年後に影響を与える物事を抽出したりするワークを通じて、一戸町の課題解決を考える機会とした。

参加者アンケート結果によると、本ワークショップを通じてフューチャーデザインに対する理解が深まり、その必要性に対する認識が高まったことが確認された。



ゼミワークショップ（一戸町）

(2)SDGs ワークショップ

岩手県内の高校ではSDGsの取組が急速に進んでいる一方、脱炭素の取組はまだ本格的に行われていない。このため、すでに実施しているSDGsワークショップからスタートし、その内容を拡張して実施することとした。

令和5年度は葛巻高等学校と一戸高等学校の生徒を対象に、それぞれ3回にわたりワークショップを開催した。実施内容については、両校とも同様のものである。

第1回は「SDGsワークショップ」として、地域の人口減少、経済、社会、環境の結びつきを理解するため、「SDGs de 地方創生」カードゲームを通じたワークショップを実施し、具体的な地方創生の政策への理解を深めた。

第2回は、未来シミュレーターや、地球温暖化等による地域の未来の姿を表したテキストを用い、座学で学習した。

第3回は、「脱炭素・未来ワークショップ」として、生徒を一班4～6名程度に振り分け、始めにこれまでに実施された講義などを基に、それぞれ地域の課題を抽出し、次にその解決となる政策を検討し、模造紙に張り出し整理した。最後に、各班から主な政策について発表し、町職員から講評をいただいた。なお、生徒たちが取り上げた課題の多くは、人口減少や少子高齢化、空き家の増加、農業・林業の衰退、医療・介護の不足など、地域と社会の問題に関するものであり、生徒たちの関心の高さと懸念とを反映していた。

受講者アンケート結果によると、生徒たちが町の未来をそれぞれ考え、理解を深め、意識の向上が図られたことが示された。また、グループワークがコミュニケーションをとる上で有効であったことが示され、ワークショップの有用性が示された。



SDGs ワークショップ（葛巻高校）

3. 今後の活動

令和6年度においては、葛巻高等学校及び北桜高等学校（一戸高等学校と福岡工業高等学校が令和6年度に統合して誕生）において、引き続きSDGsワークショップを実施する。

また、沿岸地域の小学校においては、児童が海からごみを拾い、それを調査・分類し、さらにそれを活用したアート作品に仕上げるといった作業を通じ、資源の再利用を含めた環境保全活動につなげる環境学習である「海ごみ教室」を実施することとしている。



SDGs ワークショップ（一戸高校）